

# ナイチンゲール—社会組織改革に見る国家の責務

— 汝自身を知れという言葉は国家にもあてはまる —

広島文化学園大学看護学部・大学院看護学研究科  
佐々木 秀 美

**論文要旨** 本論はナイチンゲールの生涯史にジョウエットとナイチンゲールが、プラトンの『対話集』を改訳する際に、神秘主義とイデア論との合体論の正当性等について語り合ったという文字を見つけ出したことに端を発する。そこでナイチンゲールの数々の主張に見出される国家の責務についての検討をプラトンの哲学の中から、その一致点を見出そうとしたものである。ナイチンゲールの思想には、プラトンのイデア論と神秘主義との関係と同じように、神秘主義と主知主義的哲学との一体感があったように思う。日常生活における人々の生存の問題は、何事にも優先される問題であり、貧困・無知・病気など、国内における諸問題を解決し、国民の健康的な生活を保障するのは国家の責務であると考えたナイチンゲールは、自己を知れという考えは国家にも当てはまると考えた。プラトンの理想国家は、その成員それぞれが己に課せられた徳を実践することで、全体としての徳つまり公正が実現される。それは、国家が正しく運営されてはじめて、それに属する各個人の徳も正しいものになると考えたからであり、ナイチンゲールの考えは、ある一つの階層だけが特別に幸福になるというのではなく、国の全体ができるだけ幸福になるようにと述べるプラトンの理想国家のあり方と類似の思想を見出すことができる。また、徳を知識と考えるプラトン哲学で彼は、国家統治者を徳の方向へ向け替えさせるために必要なのが教育であると考えたが、ナイチンゲールは、知識は行動するためにあると考えた。それはナイチンゲールが単に思弁的な哲学ではなかったことを示している。

**キーワード**：ナイチンゲール，プラトン，人間の徳，神秘主義，イデア論

## ■ はじめに

汝自身を知れ (Know thyself) という言葉は、デルポイ<sup>1)</sup>のアポロン神殿入口に刻まれた古代ギリシャの格言として有名である。その格言はギリシャの高名な哲学者、ソクラテス<sup>2)</sup>の言葉であるとも言われるが、実際には不明である。汝自身の汝が誰のことを指すのか？汝と指さす人物は神のような人で、指さすその向こうに存在するのが私たち人間であるとしたら、それは人間自身が己を知る、つまりは自己を知れという事も出来るであろう。ナイチンゲールは、「自己を知れ」<sup>3)</sup>という言葉のある伝道者の言葉として引用し、自己を知ることによって神の内に自分を見ることができる

と、キリスト教的側面から述べている。自己を知るということは“内省する・内観する”とも言いかえることができ、自分の考えや行動などを深くかえりみることである。内省・内観によって自己理解につながり、人は成長・進歩する。

ナイチンゲールの様々な改革は、“汝自身を知れ”という言葉は個人としてより、組織のリーダーとしてあるいは、国家の統治者のあるべき姿を論じているように思われる。その代表的な取り組みが陸軍の改革であり、『ナイチンゲール—イギリス陸軍省を改革する—学習（経験）したことから学習せよ—』<sup>4)</sup>で報告した通りである。この改革でナイチンゲールはまさに時の統治者の責務を主張した。それは、自身が経験したクリミア従軍中

の兵士の衛生問題上の問題であり、特に国家の責務という点からの主張がイギリス陸軍省の改革につながった。特に兵士の衛生問題改善で論ずるならば、ナイチンゲールが格別に兵士を大切に考えているように見受けられる。何人にも生存権、つまりは基本的人権が有るとの問題も含め、特に国家の為に命をささげる覚悟の兵士達の処遇に対する統治者の徳の問題を論じたかったのであろう。

ナイチンゲールの思想は、エドワード・クックが「健全な哲学」<sup>5)</sup> であるとして、後の発見によっても覆されることのない良識の哲学であると評している。筆者も、ナイチンゲールの様々な業績から彼女の哲学を検証していく過程で、彼女の哲学は、彼女自身の日常生活における観察から導き出された人々の健康に関する普遍的な原則と、それを実施すべき統治者の責務に言及していることに気づく。『ナイチンゲール教育思想の源流』<sup>6)</sup>、『ナイチンゲール—精神的危機から自立へのプロセス—真実の目は真理の探究につながる—』<sup>7)</sup> で報告したように、ナイチンゲールの思想的背景にイギリス思想の中核をなしていた経験論的認識論があったと筆者は考えている。イギリスの宗教的・社会的・政治的変動はプラトン主義<sup>8)</sup> の復活を促し、その代表的人物がフランシス・ベーコン<sup>9)</sup> である。彼の思考方法は人間理性の働きに基づく経験論的認識論である。近代民主主義の祖とも言われるジョン・ロック<sup>10)</sup> の哲学は、経験論的認識論の立場であるが、存在一般の原理を理性に置くという合理主義的思考が、哲学の分野から自然科学の分野に広がるにつれて、伝統や宗教的制約から脱却して個人の合理的な主知主義<sup>11)</sup> 的思考へとつながった。その後、真理と善なるものとは究極的に一致するとの立場を探究するケンブリッジ・プラトニスト (Cambridge Platonists) たちが出現した。彼らはプラトン主義とキリスト教とを結びつけ、宗教的対立を解決する手段にしようとした<sup>12)</sup>。また、神秘主義<sup>13)</sup> とプラトン主義の影響を受けたとされるのがトマス・アーノルド<sup>14)</sup> とサミュエル・コールリッジ<sup>15)</sup> である。彼らの思想は、当時のイギリス思想界の中核を占めていた。ナイチンゲールもこのイギリス思想界の影響を大きく受けていたと考えられる。

『フロレンス・ナイチンゲールの生涯』<sup>16)</sup> には、ナイチンゲールがベンジャミン・ジョウエットとプラトン<sup>17)</sup> の『対話集』を改訳する際に、プラトンの神秘主義とイデア論<sup>18)</sup> との合体論の正当

性等について語り合った<sup>19)</sup> と述べられている。ジョウエット<sup>20)</sup> はイギリスのギリシャ学者であり、彼が1871年に公開した『対話集』はナイチンゲールの注釈を多く取り入れた<sup>21)</sup> と文中に書かれていた。プラトンはギリシャの偉大な哲学者である。ジョウエットはイギリスのギリシャ哲学研究者であり、ナイチンゲールとジョウエットがプラトンについて語り合ったこととはどんな内容であったのか興味は尽きない。特に彼女の兵士を思いやる態度や女性の権利運動問題での発言等に国家主義的思想があるのではないかと考えられた点である。さらに、彼女の主知主義的傾向は女性の知性という問題への言及につながっている。主知主義とはギリシャの偉大な哲学者、ソクラテスの“徳は知識である”ということを継承したプラトンの哲学的思想である。さらに、プラトンの統治者の徳は智恵であり、国家が正しく運営されてはじめて、それに属する各個人の徳も正しいものになるという思想はナイチンゲールの思想とも類似する点があると筆者は考えた。そこで、本論では、プラトンの哲学について検証し、ナイチンゲールの健康問題解決のための国家のあり方論から、プラトン哲学の影響について検討する。

## ■ プラトンの哲学

### 1. プラトンの生涯

プラトンについては『プラトン I 生涯と著作』<sup>22)</sup>、『Plato and Pythagoreanism』<sup>23)</sup>、『国家上』<sup>24)</sup>、『国家下』<sup>25)</sup>、『プラトン『国家』における正義と自由』<sup>26)</sup>、『ソクラテスの弁明 クリトン』<sup>27)</sup>、『メノン—徳(アレテー)について』<sup>28)</sup>などを参考にした。プラトンの哲学について論じる前にプラトンの生涯について論じる。

プラトンは、古代ギリシャの哲学者として有名な人物であり、ギリシャの最後の王コドロスの血を引く貴族の息子としてアテナイに生まれた。父アリストン (Aristōn) はコドロス王の末裔であり、母ペリクティネホ (Periktionē) は、ソロン<sup>29)</sup> の家人であるドロピデス (dropidēs) の家系である。ソロンはアテナイの民主政治の機構を作った最初の人物として知られる<sup>30)</sup>。プラトンの一家は土地の貴族に属さないで、ソロン以来の民主派の正統に属し、家計は豊かではなかった。彼は、祖父の名にちなんで「アリстокレス」と命名されたが、体格が立派で肩幅が広がったため、レスリングの

師匠であるアルゴスのアリストン「プラトン」と呼ばれ、以降そのあだ名が定着した。

彼は、アテナイ青年として普通の教育を受け、文学や科学に特別な関心を持っていた。また、政治にも関心を持った。若いころに師ソクラテスに出会い、彼から問答法や弁証法や無知の知や正義・徳・善を理知的かつ執拗に追求していく哲学者としての主知主義的な姿勢を学び、国家公共に携わる政治家を目指した。しかし、ソクラテスの死によって、時の政治その後の民主派政権の惨状を目の当たりにして、政治に対する希望を打ち碎かれ、ソクラテス死後の30代からは、現実政治に関わるのを避け、対話篇を執筆しつつ、ソクラテスの生と死の謎を解明しつつ、哲学の追求と政治との統合を模索していくことが彼の新しい仕事になった。

『ソクラテスの弁明』は、不正な死刑の宣告を受けたソクラテスが、国法を守って静かに死を迎えようとする立場に対して、友人のクリトンがソクラテスに脱獄を勧める対話を通して、ソクラテスの偉大さを示そうとした著作である。この頃、既に、哲学者による国家統治構想や、その同志獲得・養成の構想が育っていった。

プラトンは、師ソクラテスから、“徳は知識である”という主知主義的な発想と、問答を通してそれを執拗に追求していく愛智者（哲学者）としての姿勢を学んだ。初期のプラトンは、ソクラテスが、正義・徳・善などを目指し、悪戦苦闘を続ける様を描いていたが、40歳頃の第一回シケリア旅行で、ピュタゴラス学派<sup>31)</sup>と交流を持ったことで、数学・幾何学と、輪廻転生する不滅の靈魂（Psyche プシケ）の概念を重視するようになり、それらと対になった感覚を超えた真実在としての“イデア”概念を醸成していった。

プラトンが交流を持ったピュタゴラス教団は特定の教に神秘的な性格を見出しており、その教説の一端がプラトンの『国家』の宇宙像にも現れている。帰国後、プラトンは、アカデメイアに学園を開設し、初期末・中期対話篇を執筆した。この、アカデメイアの学園に入門してきたのが有名なアリストテレス<sup>32)</sup>である。アリストテレスはそこで勉学に励み、プラトンが死去するまでの20年近い年月、学徒としてアカデメイアの門に留まった。アリストテレスはプラトンの対話によって真実を追求していく弁証法ではなく、経験的事象を元に演繹的に真実を導き出す分析論を重視した。



プラトンとアリストテレス (Wikipedia) より引用

このような手法は論理学として三段論法などの形で体系化された。

## 2. プラトンの哲学

『国家上』<sup>33)</sup>『国家下』<sup>34)</sup>あるいはプラトン哲学入門編とも言える『プラトンの哲学』<sup>35)</sup>によれば、プラトン哲学の主要概念はイデア論である。さて、彼のイデア論を筆者自身が理解することは非常に困難なことであることから『哲学辞典』<sup>36)</sup>の説明に頼ることとする。

イデア論は、ギリシャ語の *ideo* (イデア) に由来していて、“見る”という意味の動詞“*idein*”である。もともとは“見られるもの”のこと、つまり、ものの姿や形が眼前に見えることを意味している。“*eido*”の過去形に由来する *eidos* (エイドス) という言葉は、形とか図形という意味でごく普通に用いられる言葉であった。プラトンは、エイドスとイデアを使い分け、イデアに特殊な意味を与えた。彼はイデアという言葉で、われわれの肉眼に見える形ではなく、言ってみれば“心の目”“魂の目”によって洞察される純粋な形、つまり、ものごとの真の姿やものごとの原型について言及した。プラトンのいうイデアは幾何学的な図形の完全な姿がモデルともなっている。プラトンにおけるイデアの理解は一定しているわけではなく、書かれた時期によって変遷が見られるという。一般にプラトンのイデア論というと中期のそれを指していることが多いようである。『国家上』ではイデア論に基づく哲学者への問いがあり、『国

家下』では、善のアイデアとして、太陽・線分・洞窟の比喩を用いながら、説明をしている。太陽の放つ光線は見えないが、私たちの視覚で見えるものを見えるようにし、洞窟は、暗闇であり、見えるものを見えないようにする。その間の線分は見える範囲の限界を示す。その上で、プラトンは「知的世界には、最後にかろうじて見てとれるものとして、善の実相（アイデア）がある。いったんこれが見てとられたならば、この善の実相こそあらゆるものにとって、すべて正しく美しいものを生み出す原因であるという結論に至らなければならぬ。見られる世界においては、光と光の主を生み出し、思惟によって知られる世界においては、自らが主となって君臨しつつ、真実性と知性とを提供するものであるのだ。そして、公私いずれにおいても思慮ある行いをしようとする者は、この善の実相こそ見なければならぬ。」<sup>37)</sup>と語っている。その上で彼は、上の世界で神的なものを見ていた人が、そこを離れてみじめな人間世界へと立ち戻り、その暗闇に十分に慣れないでいるうちに、法定その他の場所で正義を良く知らない者たちが争いを起こすことが非常に滑稽であるとしている。そして、プラトンは光から闇に移された時におこる混乱と闇から光へと移された時の混乱は、目が十分に慣れていないときにおこる問題であり、無知と知の間の問題であるとした。

つまり、プラトンは、我々の魂はかつて天上の世界にいてアイデアだけを見て暮らしていたのだが、その汚れのために地上の世界に追放され、肉体（soma ソーマ）という牢獄（セーマ）に押し込められてしまった。天上の神聖な世界と地上の人間界との往来という輪廻転生説<sup>38)</sup>、そして神秘主義とアイデア論との合体論が展開される。そして、人間は天界から地上へ降りる途中で、忘却（レテ）の河を渡ったため、以前は見えていたアイデアをほとんど忘れてしまった。だが、この世界でアイデアの模像である個物を見ると、その忘れてしまっていたアイデアをおぼろげながらに思い出す。このように我々が眼を外界ではなく魂の内面へと向けなおし、かつて見ていたアイデアを想起するとき、我々はものごとをその原型に即して、真に認識することになる。ゆえにプラトンは、真の認識とは想起（アナムネーシス）にほかならないと言うのである。想起説が導入されることでプラトンの哲学では、真の Philosopher（愛知者＝哲学者）は、できるかぎりその魂を身体から分離開放し、魂が純

粋に魂自体においてあるように努力する者だとした。この愛知者の魂の知の対象がアイデアである。生成変化する物質界の背後には、永遠不変のアイデアという理想的な範型があり、アイデアこそが真の実在であり、この世界は不完全な仮象の世界にすぎないと考えるのがプラトンのアイデア論である。

プラトンによれば、不完全な人間の感覚ではアイデアを捉えることができず、アイデアの認識は、かつてそれを神々と共に観想していた記憶を留めている不滅の魂が、数学・幾何学や問答を通して、その記憶を「想起」することによって近接することができるものであり、魂が真実在としてのアイデアの似姿（エイコン）に、かつての記憶を刺激されることによって、アイデアに対する志向、愛・恋（erôs, エロス）が喚起されるのだとした。プラトンの対話編では、アイデアは事物の超感性的な意味で用いられてきていたが、近年、プラトンのアイデア論は観念（idea）として解釈されるようになってきている。観念は仏教の真理を観察理念するという意味で用いられていたが、人間の心の中にあらわれる表彰、想念、意識内容を意味する言葉として用いられ、英語のアイデアという言葉の訳語が観念である。

### 3. プラトンの徳について

“徳は知識である”というソクラテスの思想は、プラトンの哲学における主要なテーマである。プラトンは、師ソクラテスから問答法（弁証法、ディアレクティケー）を受け継いだ。著作『メノン－徳（アレテー）について』でプラトンは、メノンという人物とソクラテスとの対話を通して徳についての弁証を試みている。著作は“徳とは何か”“徳は教えられるものなのか”と言う疑問を投げかけることに始まる。特に“徳は知識である”というソクラテスの言葉を借りての知の探究は重要である。プラトンはソクラテスに「人は自分が知らないことを探求すべきであると考えようが、より優れた者であり得るし、より勇敢であり、より怠けない者であり得るのだということ」<sup>39)</sup>と述べさせ、「知性を伴って学ばれしつけられるならば有益だが、知性を欠いたならば有害である。」<sup>40)</sup>と弁論させている。プラトンは、徳とは何か？という問いを持ち、“不知なる対象の探求は不可能だ”と説く立場に対して、学習は想起であると考えた。そのことが前提として認められるのであるならば、「教育とはまさに、その向け替えの技術に

他ならない。』<sup>41)</sup>と考えている。つまり、われわれ人間は、視力ははじめから持っているけれども、その向きが正しくなくて見なければならぬ方向を見ているとしたら、その点を直すように工夫する技術が教育そのものであると考え、無知の愚かさが導く不幸について、「魂が積極的に試みるどんなことも、あるいは受動的に耐えしのぶどんなことも、全て、知が導くなら幸福に行き着くが、無知な愚かさが導くなら、これと逆の不幸に行き着いてしまう。』<sup>42)</sup>と述べた。

「もしも、徳が、魂のうちにあるものの何かであり、そのものとして有益でなければならないならば、徳は知でなければならない。』<sup>43)</sup>と考えた。そして「もしも政治家が知識のゆえに統率できているのではないなら、残っている可能性は、優れた可能性によって統率者になることである。政治家はそうした優れた推測を利用して国家を正しく治めているのであり、彼らは知の点では、託宣を「述べる人々や神懸りの預言者と何ら異なるのだ。』<sup>44)</sup>と述べ、神懸りの人々が多く語ることはあっても自分が語っていることに対して何一つ知ってはいないと述べた。弁論の最後にソクラテスは、「徳は、それが人に備わる場合には「いつも神的な運命によってわれわれに備わることは明らかである。だが、われわれが徳そのものについて明確なことを知るのには、いかにして徳は人々に備わるのか？という問題以前に、徳はそれ自体として、いったい何であるか？の問題に着手するときなのだ。』<sup>45)</sup>と論じている。

“徳は何であるか、教えうるのか” “徳の教師を自認するソフィスト達は何を教えているのか”等の関連論も含めれば、初期の頃からほぼ全篇に渡って教育論の展開である。プラトンは国の守護者、指導者、立法者であるべき哲学者たちに必要な教育だと考えていた。プラトンが考える統治者の徳は智恵であり、戦士の徳は勇気であり、普通人の徳は節制であるとの考えは、全体としての徳つまり公正が実現されるとの考えが、プラトンの理想国家のあり方につながったと考えられ、国家が正しく運営されてはじめて、それに属する各個人の徳も正しいものになるとの考えにつながっていると考えられるのである。

#### 4. プラトンの理想国家

プラトンは著『国家』で、理想国家の成員は三つの階級に区分されなければならないと述べてい

る。その三つの階級とは統治者、戦士、普通の人である。この三つの階級を金・銀・銅に大別した。まず、第一に政治に関わる国家統治者は最も善なる人々であり、これは金の資質、防衛に関わる戦士は銀の資質、最後に普通の人銅である。これらの区分から考えると兵士は統治者を助け国防に当たる銀の資質のものである。

さて、プラトンが人間の種類を三つの階級に分けたのにはそれなりの理由がある。プラトンによれば、神こそが三つの種類の人間を創造したのである。最も善なる人間は金から、次に善なる人間は銀から、そして普通の人間は真鍮と鉄から作られたのである。国家を統治するものは最も善なる人々でなければならない。プラトンの理想とした国家像は究極の超国家主義的な社会のありかたを理想とした。プラトンは、できうればただ一人の人による統治を望ましいものであると考えていた。したがって、プラトンの国家説を貫いている思想は、個に対する全体の優位である。つまり、国家に固執するあまりに個人の権利は完全に無視されるに至っている。あらゆる個人的意欲や個人的目的は、全体的意欲や全体的目的のうちに埋没させられている。プラトンにとっては、全体である国家的な権威が実現されることによって、個人も始めて国家の善にあずかることができるのであるから、普通の意味での家族というものは認められない。

プラトンがこのような考えを抱くに至った背景には、貴族の生まれであるという彼自身の出自と、当時のアテナイに行われていた民主政治への反発があったからであると言われている。師匠ソクラテスを死に追いやったのは、ほかならぬアテナイの民主政治であった。民主政治は衆愚政治をもたらす。その結果、高貴なものは排除されて、俗悪なものばかりになる。アリストテレスの『アテナイ人の国制』<sup>46)</sup>に見る限り、アテナイの民主政治は、ソロンがその基礎を作ったとされる。問題が起きる都度、民衆の代表である評議会が政治を行っていた。つまり、その民衆の代表者が有徳者であるかどうか問われる問題である。もし、そうでない場合の裁判過程の悲惨さは正しい過程で結末を迎えることができるのかどうか。その場合、統治者の徳としてその支配のあり方に委ねられることになる。人間は決して完全なものではないからだ。

他方、隣国のスパルタ<sup>47)</sup>においては厳格な階級制度が敷かれていて、人びとは生まれと能力に

応じて、統治するもの、戦うもの、統治されるものへと区分されていた。しかも統治階級や戦士階級の内部においては、原始共産制的な共同生活が徹底されていた。この新興の国家は、著しいエネルギーに満ち、あらゆる点でアテナイより優れているように見えたばかりか、ペロポネソス戦争<sup>48)</sup>以後の世界において、覇者としての実力を蓄えつつあった。スパルタにおける極めて厳格かつ過酷な訓練を施すことが特徴とされるその教育は、スパルタ教育と呼ばれ、自己が帰属する組織への忠誠心の涵養や、軍事訓練、歌唱、舞踊、狩猟など総合的な社会学習を主眼としていた。スパルタの教育制度を作ったのはリュクルゴス<sup>49)</sup>と呼ばれる人物である。『プルタルコス英雄伝』<sup>50)</sup>の二番手として登場するリュクルゴスは、国家の繁栄と徳性のために最も決定的で重要なものは、市民の性格と訓練制度のうちに原理として植え付けられれば、若者たちめいめいが、強制よりも一層強い絆として心の中に生み出す決意が不動かつ賢固に続き、強固なものとなると考えた。

プルタルコス<sup>51)</sup>著『プルタルコス英雄伝』によれば、スパルタでは、子供は国の財産として珍重されていた。スパルタでは、子どもたちは生まれるや親元から切り離され、社会全体で育てられる。同国の子供は7歳になると厳しい軍事訓練を課せられ、その過程で体に障害を生じた子供等を殺害していき、残ったものだけを市民として育てた。アテナイの、自由で芸術や弁論を尊重した教育の対極にある。そこではまず、親は自分の子供を自由に育てる権利を持っていなかった。子供は都市国家スパルタのものとして、生まれた子供はすぐに長老の元に連れて行かれた。そこで健康でしっかりした子と判定されれば育てる事が許される。病身でひ弱な子供は生きていても国の為にならないとして、アポタタイの淵に投げ捨てられた。生きるに値する人間とは、美しい身体をもったものである。不具や病気の子供は棄てられるべきであり、病人は看護されてはならないのであった。また、軍隊の駐屯地に集められた子供たちは、いくつかの組に分けられ、同じ規律の下、生活と学習も一緒に行われた。そこで規律は“命令に服従すること”“試験に耐え、闘ったら必ず勝つこと”などで、頭は丸刈りにされ、下着姿に裸足で訓練を行った。12歳になると、下着はなくなり全裸となり、沐浴も禁止された。また、上官による体罰も全裸で行われた。教育は成人するま

で続き、町でも駐屯地にいるのと同じ生活を求められ、公人として国に仕えているという自覚を常に求められた。20歳になると部下を持ち、戦争の時は指揮し、家では彼らを召使いにした。女性も“強い子供を産める母体の育成”のために幼少期から厳しい体育訓練を受けていた。処女たちが裸になることは、羞恥心があって放埒（ホウラツ）がなければ少しも恥ずべきことではなく、簡素への憧れと健康への熱望を生じさせ、また、自分たちにも何ら劣ることなく、徳性と名誉心にあずかるものとして、女性に高貴な自尊心を味あわせた。女性に対するこれらの扱いが高貴な自尊心につながるとしたら、他のポリスと比べて女性の権利や地位はある程度認められていたことになる。これらのことは結婚を促進するものであった。リュクルゴスは、結婚をしていない者には一つの不名誉を与えたようだ。

また成年の男と女は夫婦として二人だけの生活を営むことは許されない。国家のプランにしたがって、必要に応じて男女が出会い子どもを作るが、そのさい能力の高い男がより多くの子どもを生むように配慮がなされる。こうであるから、子どもたちは誰でも、父親に相応しい年齢の男を父と呼ぶ。母、兄弟、姉妹についても同じようであればならない。子どもたちの教育にあたっては、音楽と体操が重視される。音楽については、人々に勇気を与えるような曲が選ばれなくてはならず、望ましいのは行進曲のような音楽である。体操は子どもたちに頑健な身体をもたらす。強いスパルタ国は、強い国民で形成されていなければならない。

よって、プラトンにとってすべての人間が平等ということはありません。人間には能力や資質において歴然とした差がある。だから国家社会は、人間のこの差を前提にして運営されなければならない。思慮に欠けた人間たちは、統治に与らせべきではなく、国を守るべきものは、それに相応しい勇気を持たねばならない。これで富国強兵国家が出来上がるというわけである。プラトンの国家論はある意味で、スパルタの教育制度を理想化したものとも受け取れる。彼は理想国家の成員は三つの階級、すなわち、統治者、戦士、普通の人に区分されなければならないと主張する。そしてそれぞれが己に課せられた徳を実践することで、全体としての徳つまり公正が実現される。統治者の徳は智恵であり、戦士の徳は勇気であり、

普通人の徳は節制である。これら各階級に固有の徳と国家全体としての徳との関係においては、国家の徳が優先される。国家が正しく運営されてはじめて、それに属する各個人の徳も正しいものになるのである。このようにプラトンの国家論は、国家優位の考えに立ったものであり、そこには個人の意味は最低限においてしか認められない。諸個人の徳の総和が国家の徳を構成するという考えではなく、国家の徳が諸個人に反射的に及ぶのだという、全体主義的な色彩が強い考えに立っているのである。この考えは、国家構成員の生活や教育に関する説の中に強く現れ、彼の徹底した共産制として現れた。プラトンにとって、哲学・政治と密接に関わっている教育は、重大な関心事であり、彼の教育論・教育観は、『国家』にも描かれ、数学的諸学と共に、哲人王<sup>52)</sup>が修めるべき教育内容として言及される。

## ■ ナイチンゲールの行動が示す国家の責務

### 1. クリミア戦争時の看護管理体制と国家の義務

クックをして“健全な哲学”と言わしめたナイチンゲールの人々の健康維持のための原理・原則は、自身の日常生活及びクリミアの経験から導き出された。システムの愚かさによる病院での死亡率は、国家の過ちによって引き起こされたものであり、その過ちによって勇敢な男性達が結果的に全て負担を背負ったとのナイチンゲールの主張は、統治者が負うべき責務についての根本的課題である。主張の多くはクリミアで経験したことによる陸軍組織と病院の機構の問題、物資供給システム、医師の技術不足などの問題である。彼女の思想の背景には人間存在の問題として人格と生存権の問題がある。人々の生存の問題は、イギリス国民の健康ニーズであり、国家が保障しなければならない正当な権利である。人々の日常生活における健康を維持するための清潔な水の供給や身体の清潔の維持は、外地に派遣された兵士たちにも同様に保障されなければならない。ゆえに、バラックでの生活であれ、野営地であれ、それは維持するは、戦争という手段を選択し、国民の一人である兵士達にその生活を強いた国家の義務である。季節や気候によって衣服を調整し、体温を一定に保つその行為を本国の安全な自宅に生活する全ての人々が自発的に行うように、外地の環境、すなわち、暑さや寒さなどの気候に対する備え、外地で

働く兵士たちに降りかかるであろう、様々な危険を回避する為の手段を講じるのは軍関係者の当然の責務であった。兵士の死亡率の高さは陸軍の怠慢がもたらしたものであり、人災であると考えた。

過去に知ることが出来なかった学習をクリミアでの経験から学んだとしたら、その経験から学習し、衛生学における新しい知識を開発し、実践への応用が求められるのであった。そして、それは平時に組織され、日ごろから訓練しない限り、実践に適用できるものではなかった。ナイチンゲールは、戦地における兵士の生命は野営からの危険・包囲攻撃からの危険のみならず、健康のための原則が損なわれることによってももたらせられることを知った。「私が軍の為にすべきことがあったのにも、それをしなかったとしたら私は火あぶりになってしかるべきである。」<sup>53)</sup>というナイチンゲールの言葉は、悲惨な現象に見てみぬふりができない彼女の高邁な感情と社会的責任の強さが現れている。ナイチンゲールにとってその責任を果たすこと、それはイギリス陸軍省の改革である。兵士たちのための更なる闘い、それは彼女の次なる行為、すなわち、陸軍を改革するという行動を引き起こさせた。

既に『ナイチンゲール—イギリス陸軍を改革する—学習（経験）したことから学習せよ』<sup>54)</sup>でも報告したように、陸軍医務局徹底改善の構想は一重に彼女の緻密な戦略とこれを忠実に実行する男性政治家との協働によって行われ、Ⅰ. 衛生部門の分割についてであり、続けて、Ⅱ. 医学の会議の設置、Ⅲ. 部門間の協議、Ⅳ. 衛生上機能の拠点、Ⅴ. 医学教育、Ⅵ. 総合病院と学校、Ⅶ. 軍医科、Ⅷ. 機構についてである<sup>55)</sup>。特に、機構には組織上の支障があった。衛生改善のその特定部門はバラックに関することであり、確実に改善が進むことである。そして、この改善は完全なシステムの基礎がしっかりし構築されることによって安全になさなければならない。全て個々人は自身の役割と義務を知るべきである。そして、個々人の任務は完全に機械的な機構システムとして規定され、極力単純化されなければならない。さらに、この種の問題に関しては衛生関係部門の長に誰が任命されるかどうかに関係なく、我々の国家を守るためには、そうした軍の問題に我々一般市民の参加が認められなければならない。その為の道は開かれるべきであると考えた。

ハリエット・マーティノウ<sup>56)</sup>はシドニー・ハー

パート<sup>57)</sup>とナイチンゲールの改革を後押しするために『連隊の病院システムを改革すること』、デイリー・ニュース、1859年1月26日<sup>58)</sup>。『市民軍の医学訓練』、デイリー・ニュース、1859年2月<sup>59)</sup>。『軍隊の衛生改革』『何が実施されたのか?』、デイリー・ニュース、1859年2月16日<sup>60)</sup>など次々と新聞記事を書いた。1861年12月付けのアトランティック・マンスリー『病院の衛生』<sup>61)</sup>には、クリミアにおける新聞記事が挿入されている。その中で、システムの愚かさによる病院での死亡率について言及され、他の男性達の過ちの結果によって、勇敢な男性達が結果的に全て負担を背負った<sup>62)</sup>と総括された。

ナイチンゲールは「この仕事は多くの障害のもとに遂行されたのであるが、中には不可避のものもあれば、避けようと思えば避けられたものもあった。深く遺憾に思うものもいくつかあったと述べ、修道尼たちとの間に起きた抗争事件や看護師たちの泥酔事件などは組織の面目を傷つけるものであった。又、虚栄と饒舌と不服従のために、どんなに実務的に役立つとも女性にはこの仕事は不適で有害であるとの世評が正当化されることになる。」<sup>63)</sup>と述べた。一方ではクリミア従軍中の内部スタッフから、他方では外部からの匿名の攻撃に対して説明を加えたり、回避したり激しく抗議したりした。1858年にマーティノウに宛てた手紙でナイチンゲールは、あることない事を書き散らす女性たちに対して「女性のインク壺 (Female ink Bottle)」<sup>64)</sup>と強く非難した。これは女性文筆家たちへの攻撃である。リットン・ストレイチー<sup>65)</sup>が最大の皮肉をこめて、「ナイチンゲールの猛烈なペンには神をも殺してしまうであろう」<sup>66)</sup>と評したほどだ。

陸軍との対立の中で、ナイチンゲールに対する熾烈な攻撃もあり、改革の途中でストレスから、改革に協力したシドニーが体調を崩し死亡、もともと病弱であったクラフも死亡した。そして、ナイチンゲールに共感を寄せ自分の人生と処世の方針を変える行動を取った医務局長のトマス・アレクサンダー<sup>67)</sup>も死亡した。彼らを失ったことはナイチンゲールにとって大きな衝撃であると同時に社会的にも大きな犠牲をはらったことになる。それでもナイチンゲールの改革の歩を止めなかった。国民の健康対策と兵士の衛生改善は必ずしも提言どおりではなかったが、陸軍を改革しようとするナイチンゲールの行動の中に、国防にあたる

兵士達の勇気に対する国の責務の遂行という点で、統治者の無関心・無能力さへの怒りが満ち溢れていたと考えられる。

## 2. インド人民の健康問題改善に見る陸軍組織のあり方論

兵士達の処遇問題について言えば、インドのイギリス陸軍省に関しても、クリミアと同じく不必要な死亡事故が起きているのではないかとの疑念を抱いたナイチンゲールは、1857年に“インド駐在陸軍の衛生状態に対する勅撰委員会”を組織した。ナイチンゲールは、早速調査を開始、3年がかりでこれを収集・分析した。『インド駐在陸軍の衛生』<sup>68)</sup>、『インドの病院における看護』<sup>69)</sup>、『インドにおける生と死』<sup>70)</sup>がそうしたことの報告である。ナイチンゲールはインド駐在軍に要求される衛生活動改良に関する覚え書を完成させ、1863年『インド陸軍の衛生状況に関する勅撰委員会によって考察を委託された駐屯地報告書中の調査報告に関する所見』<sup>71)</sup>を、勅撰委員会委員長である下院議員エドワード・ヘンリー・スミス・スタンレー<sup>72)</sup>に送り付けた。

『インド駐在陸軍の衛生』によれば、インド陸軍は1.インド駐屯地の野営病、すなわち、これら、熱病、下痢、赤痢などの伝染病と肝臓病に起因し、気候が悪化を加速する。2.インド駐屯地は野営地と同様の衛生上の欠陥、すなわち、不良な水、不良な排水設備、無秩序な小屋で作られた糞の山の不衛生なバザール (Bazaar 市場)、換気の不足、兵舎と病棟における床面積の過密がある。3.飲酒による不節制、4.食事-過剰な食物、5.仕事と運動不足、6.劣悪な病院建築、7.マラリアが蔓延する高原駐屯地、8.原住民部隊の健康に必要な兵舎が供給されていなかった。原住民たちは「ジャングル、湿地、狭苦しくじめじめした住居、不良な食物と水、放置された汚物溜め、糞の山、人間や動物の死骸、排水設備の欠如、そして阿片などを原因とした」<sup>73)</sup>健康問題を有しており、最も基本的な衛生上の予防策がなされていないなど、いたるところに衛生上の欠陥が認められた。「糞の山はインドにおける未来永劫ついて離れぬ常態」<sup>74)</sup>なのであった。加えて、インドのカースト制度についても一部触れられた。

そして、不幸にも現地で寡婦となり置き去りとなっている兵士の妻たちの処遇問題にまで言及し、改善方策について提言した。また、「性病病



院は不道德な人間をその不道德が続けられるように回復させ復帰させるという原理に基づいて擁護され、支持されている」<sup>75)</sup>と述べ、兵士の性病についてその不道德さと、併せ、酒浸りという兵士の不道德さについて、良識 (common sense) について論じている。そして、彼女は、「政府はこの悪に対してその強力な権力を行使することもなく、また兵士たちに有益な仕事や男性的な娯楽等を与えることもしないで、その代わりに、その権能を用いて性病病院を設立し、またできる限り自らの手によって酒類の供給を続けることによって、アルコール中毒を阻止しようなどと、空しい努力を続け、結果的には自らの権能によって悪を助長しているのである。」<sup>76)</sup>と述べ、政府の責任について言及した。

1863年5月～10月のマクミランマガジンには『インド人の死と生命』<sup>77)</sup>、同年、8月15日付けのワンズ・ウィークには『フローレンス・ナイチンゲールの最新の慈善団体』<sup>78)</sup>、という記事がそれぞれ掲載された。インドにおける兵士の問題は感染症であった。4つの感染症—すなわち発熱、赤痢、肝臓病、コレラ等による死亡率は全インドで並外れて高かった。当時のイギリスでは1,000人につき10人は死亡していたが、インドでは1,000人につき67人が死亡した。この67人の死亡のうち、実に58人がこれらの4種類の病気からの死亡であった。そして、これら疾病の問題は全て温度、水、腐敗物が原因であった<sup>79)</sup>。ナイチンゲールは「インドの水を調整するというこの偉大で絶対不可欠の事業は、今の時点でおそらく世界中で最も重要な問題であろう。」<sup>80)</sup>と述べ、人々の精神面の進歩は物質面の進歩に依存すると述べた。ナイチンゲールには人間がある程度貧困と欠乏の束縛から解放されるにはそれ以外にないという考えがあったからである。其の点では灌漑と密接な関係を有している工業生産の問題があった。ナイチンゲールは「低賃金労働、廉価な動力と運賃、そして安価な食料を持ってインドでは、高価な工業生産、文明、日常生活等を持ちうるだろうし、それら全部が、この世界を、神が野獣よりも上で、ほんの少しだけ天使よりも下に造り給もうた人間にとって生きる価値のあるものにするのだ。」<sup>81)</sup>と結論づけた。しかし、こうした委員会の報告・勧告にも関わらず、膨大に膨らんだ軍事費削減という時の流れの中で、全て完璧には整備・改善はできなかったのが実情であった。インド人民と国防に

あたる兵士たちの処遇についても健康問題が主題であり、ナイチンゲールにとっての主要テーマは、国家の責務である。

## ■ ナイチンゲールとプラトン思想の類似性

### 1. 神秘主義的傾向

さて、プラトンの生涯と思想に見る限り、彼がキリスト教とは違う立場で、神秘主義的傾向を有していたことは、先述したとおりである。ナイチンゲールの生涯を描いたセシル・ウーダムスミスは、「ナイチンゲールは神秘主義ではあったが、単なる思弁的神秘主義者ではなく、行政的であり、行動的で精力的な実生活に身を投じながら、神との一体感を持っていた」<sup>82)</sup>と述べている。そして、同著にはナイチンゲールは、ジョウエットとの関わりの中で、神秘主義の普遍性を説き、中世神秘主義<sup>83)</sup>の多くは、プラトンの教えに近いと記述されている。思弁的と言うのは、経験によらず、思考や論理にのみ基づいていることを言う。ナイチンゲールの生涯史には、神と共に生きるということは「プラトンのアイデアとともに生きるということであり、それは単なるアイデアについて思考を廻らすことだけでなく、アイデアのために行動し労苦を負うことなのです。」<sup>84)</sup>とナイチンゲールの神秘主義は受動的なものではなく、あらゆる経験の目的は行動の強化であると説明し、中世神秘主義の多くは組織の統率者であったり、行政家であったりすると述べている。つまりは、行動することが大切なことであった。

多感な時代にナイチンゲールに影響を与えた人々、それは、スチレイチーが『ヴィクトリア朝時代の偉人たち』<sup>85)</sup>で筆頭に掲げたヘンリー・エドワード・マニング<sup>86)</sup>大司教もその一人であり、フランス修道女会のバーモンゼイ<sup>87)</sup>修道院長等の人物との交流が彼女の宗教観に大きく影響を与えたのであろう。父なる神は知・善・愛・力であると考えたナイチンゲールは、父なる神は全体が自己展開する意志として存在すると述べ、「知・愛・義が個別の事例において何と何を自問せよ。自分の性質を知・愛・義であるように訓練せよ。そうすれば神がわかるであろう。そうすれば神はあなたの存在の一部になるだろう。このためにはあなたは自分の性質にとって有益な環境に身をおかねばならないということは真実である。」<sup>88)</sup>と述べた。

ヴィクトリア朝時代のイギリスは、世界を支配し意気盛んな時代であったが、その裏には様々な問題や思いが混沌としていた。フレデリック・ウィルヘルム・ニーチェ<sup>89)</sup>の“神は死んだ”の表現からも伺えるように、伝統的形而上学を幻の背後世界を語るものとして堂々と否定された。その影響は、実存主義<sup>90)</sup>やポスト構造主義<sup>91)</sup>にも及び、イギリス文化の新たな方法を模索しなければならぬ状況にまで至った。そして、思想や芸術の分野での困難と苦渋は、西欧19世紀末の精神世界に極めて大きな衝撃を与えた。これは、現象を超越し、その背後にあるものの真の本質、存在の根本原理、存在そのものを純粹思惟により直感で探求するのではなく、時間・空間内にある個体的存在として本質を現実化していく科学時代の到来を意味する。マシュー・アーノルド<sup>92)</sup>の『文学とキリスト教義』<sup>93)</sup>には、科学思想の洗礼を受けたイギリス国民が、従来から受けてきた天国や地獄、永遠の命などはありえないといったことや、宗教と道徳の関連性などが論じられるようになったと記述されている。彼は、本来、実践のための書である『聖書』を、「聖書にはありもせぬ科学と、難解な形而上学と誤認した」<sup>94)</sup>と述べ、聖書を本来あらぬものとし、聖書の中に本来あらぬものを注ぎ込もうとしたと述べている。その結果、彼は実践が科学と教養の欠如のために阻害されたと結論付けた。

『思索の示唆』<sup>95)</sup>はナイチンゲールの宗教観や思想的見解を述べた著作であり、日常生活における現象と人間の認識との関係を哲学的・宗教的に論じようと試みた著作である。著作の中で、ナイチンゲールは、「神が信頼・愛・尊敬の対象であることを発見しなければ、神の存在や神の本質に関する観念的な思考はほとんど意味を持たない。」<sup>96)</sup>と述べ、「もしわれわれが人間を正当に評価し、正しい関係を維持しようとするれば、われわれの全能力を必要である。われわれの全能力を働かせない限り、われわれは人間を正しく評価することも人類の中で生活を営むこともできない。」<sup>97)</sup>と述べた。ナイチンゲールは極めて早い時期から神の啓示を受けたと記されている。ナイチンゲール家は家系的にはユニテリアン<sup>98)</sup>の家庭であったが、ナイチンゲールは実践的にはイギリス国教会に属していた<sup>99)</sup>。しかし、彼女はイタリアを中心に広まったローマン・カソリック (Roman Catholic) にも関心を示し、当時のイギリス社会におけるキ

リスト教の解釈に疑問を感じたりもした。1846年、ナイチンゲールが、メアリー・クラーク<sup>100)</sup>に宛てた手紙には「天地創造の物語を主題とする古いイタリアの絵画は、見えざるものが最上階に君臨していたもうことを明らかにしています。その背景の上方には永遠の父なる神の影がおぼろに映っており、はるか下方に人間どもが住んでいるのです。でも人間は下方にいながら最上階とつながりを持っています。」<sup>101)</sup>と述べ、見えざる王国が見える王国と自由に交流していることを語る類の本が好きであると述べている。天界との交流ができるとして神秘主義的な立場から多くの著作を書いたのはイマヌエル・スエデンボルグ<sup>102)</sup>である。スエデンボルグは『天界と地獄』<sup>103)</sup>あるいは『結婚愛』<sup>104)</sup>など多数の著作を著した神秘主義者である。彼は天界に行くことができ、天使たちと語ることができ、霊界のことや霊魂について語ることができ、内なる魂も含め、全ての事象について示すことができる人物であった。「美しく穢れのない器 (内なる自己) には神が宿り、神が語りかけるとしてスエデンボルグの器はきれいであった」<sup>105)</sup>とナイチンゲールは述べ、特にキリストの教えに忠実であろうとするナイチンゲールは「信仰こそが魂の真の目であり、耳である」<sup>106)</sup>と述べた。ナイチンゲールは本当に見る目を与えられるとき、神はすぐ身近におり、失われたと思うものもすぐそばに存在しているのだから、神の身元に行く必要もないのだと感じた。これはナイチンゲール自身が日常生活で感じていた心の揺れや宗教に関する心の揺れの中で、神の存在を感じた瞬間であり、日常生活の様々な現象が神との一体感の中で生まれるものであると感じた時でもあった。

ナイチンゲールは自身の内なる世界と外界との交流の中に多く神の存在を信じている。多様な宗教と科学時代の到来の洗礼を思いきり受けたナイチンゲールは、成長・発達段階において、神秘主義的要素が強まり、神の存在と日常生活の様々な現象とが、神との一体感の中で生まれるものであると感じ、真実の目は真理の探究につながると考えた。彼女の「早すぎる目覚め」<sup>107)</sup>における苦悩は、暗闇から明るい光の中に一人出てきた自身の苦悩であり、プラトンのイデア論に近い。『国家論』におけるイデア論では、太陽の放つ光線は見えないが、私たちの視覚で見えるものを見えるようにし、洞窟は、暗闇であり、見えるものを見えないようにする。知的世界においてかろうじて見てと

れるものとしてのアイデアは、いったんこれが見てとられたならば、すべて正しく美しいものを生み出す原因であるという結論に至り、見られる世界においては、光と光の主とを生み出し、思惟によって知られる世界においては、自らが主となって君臨しつつ、真実性と知性を提供するものであるという考えである。それはまた、当時の宗教に対する社会の認識を否定し、キリスト教を受け入れながらも、単にキリスト教的あるいは神秘主義とも言いきれないような彼女独特の思想的世界を生み出した。「属性としては人間のもののよう見えながら、程度においては人間を超えている力と知恵が、その意思と目的の中に明らかである。」<sup>108)</sup>と述べたナイチンゲールの言葉は、次の「理性と哲学は今や真理を仲良く追究するというより、迷信と教条主義に反対するために腕を組んでいる」<sup>109)</sup>という考えにつながり、真理の探究に関わる限り、それは、神秘主義と哲学における探究が、われわれの存在するものと、意志と目的が人類に及ぼすことの明白さについての論評である。神秘主義との関係において「感覚が外界を知るように神を感知し神を理解する魂とか直観という特別な能力」<sup>110)</sup>という場合、その能力は知性であると述べる。

## 2. 主知主義的傾向

神秘主義との関係において“感覚が外界を知るように神を感知し、神を理解する魂とか直観という特別な能力”という場合、その能力は“知性(Intelligence)”であると述べたナイチンゲールは主知主義的傾向を強く有していた。先述したように、主知主義とは、一般に知性や知性的なものを尊重する態度を言う。認識論的には感覚論、経験論、直観主義に対立して、実在は理性によって把握できるというプラトンやアリストテレスに代表される立場を指す。父なる神は知・善・愛・力であると考えたナイチンゲールは、父なる神は全体が自己展開する意志として存在すると述べ、「知・愛・義が個別の事例において何と言うかを自問せよ。自分の性質を知・愛・義であるように訓練せよ。そうすれば神がわかるであろう。そうすれば神はあなたの存在の一部になるだろう。このためにはあなたは自分の性質にとって有益な環境に身をおかねばならないということは真実である。」<sup>111)</sup>と述べた。

かつてオーギュスト・コント<sup>112)</sup>は「女性は知的作業には極めて不適格」<sup>113)</sup>との意見を述べ、そ

れは知性の内在的な弱さのせいであると述べた。ナイチンゲールはこの見解を崩す人物であった。ナイチンゲールは「なぜ、女性は男性のように抽象的概念を理解する事ができないのか。なぜ女性たちは男性と比較して創造性に欠け、知性に欠け、自己決定ができず、宗教的感化も少ないのか、何故、女性たちは芸術や科学あるいは文学の世界で一つの業績も果たすことができないのか?」<sup>114)</sup>と指摘した。なぜ、女性は男性のように抽象的概念を理解する事ができないのか。彼女自身の磨き上げた知性から考えた場合、自分以外の女性たちの無知が信じられなかったのであろう。女性たちは男性と比較して創造性に欠け、知性に欠け、自己決定ができず、宗教的感化も少ないと指摘し、何故、女性たちは芸術や科学あるいは文学の世界で一つの業績も果たすことができないのかと疑問を投げかけた。その疑問は知的好奇心となって自らの疑問に答えを出すかのようにナイチンゲールは行動した。

女性が知性を持つべきという思想的根底は揺るがない。何を為すべきかの問いは、知性の問いであり、その答えも知性が為すべきことであり、人間としての道徳的行動の基本姿勢でもある。ナイチンゲールは自身の体験から、「生活は心を目覚めさせて問いを抱かせ、心は知性を目覚めさせてその問いに答えを要求する。」<sup>115)</sup>と述べた。非常に含蓄のあるこの言葉はコントの言葉を引用したとナイチンゲール自身が述べている。「もし、我々が人間を正當に評価し、正しい関係を維持しようとすれば、我々の全能力が必要である。」<sup>116)</sup>と述べ、「人間が自らの能力を働かせることによって無知から真理を求め、不完全から完全へと進んでいく」<sup>117)</sup>と述べる。ナイチンゲールにとって知識は単なる知識ではなく、行動するために必要なものであった。批判的思考(Critical Thinking)の強いナイチンゲールは、日常生活における様々な現象を分析的に解釈し、その現象の問題を把握する能力に卓越していた。ゆえに、ナイチンゲールの場合、その知識は、今日起きている現象をそのまま受け入れるのではなく、科学的な根拠を持って物ごとを観察し、認識し、行動変容するために必要であった。そして、ナイチンゲールの姿勢は現実の社会における矛盾点を指摘、改革しようとする積極的な態度につながった。「知性に基づいた従順」<sup>118)</sup>は医療の中で医師と協働する上で、何を為すべきかがわかる看護師の徳性であった。ナイ

チンゲールが述べた優れた看護師は「知性 (intellect), 倫理 (moral activity), 実践 (practice) において最上のものを患者に惜しみなく与える」<sup>119)</sup>と述べている。どう行動するべきかを考えることのできる能力が知性であり、その知性に従って有徳な行動をすることが道徳的なのである。マシューが、キリスト教における実践の有意性を強調したように、ナイチンゲールにおけるキリスト教的愛の実践が看護であった。ゼーレン・キルケゴール<sup>120)</sup>の解釈に従えば、神に対する愛こそ、真の利己愛であり<sup>121)</sup>、神の立場からすれば自己愛とは神に対する愛に他ならない<sup>122)</sup>。つまり、あらゆる行動を決定するのは神の意志であるとともに自分自身の意志でもある。

### 3. “徳”について

ナイチンゲールの生涯の業績において“徳”という問題は外せない。“徳”は知識であるとの考えはいささかも揺るぐものではないが、ナイチンゲールにとって行動の伴わない知識は弊害であるばかりか意味のないことであった。彼女にとって「知性、情熱、倫理的行動」<sup>123)</sup>は人間が有すべき“徳”であり、“徳”を有している女性がなぜ、働く場所がないのかとの問いは若かりし頃からのナイチンゲールの疑問であった。女性を有徳にして女性に社会貢献させようとの働きかけも“徳”に関わることである。ナイチンゲールが、女性がなぜ、社会で活動できないのかとの問いは、イギリス社会における実際に起きている現象の認識であり、イギリス国民それぞれが己に課せられた徳を実践することで、全体としての徳つまり公正が実現されるとしたプラトンの思想的影響は大きいのではないかと考えられる。

イギリスの教育改革でみる限り、ロバート・オーエン<sup>124)</sup>が実施した教育もアーノルドの教育改革も基本的には徳の問題がある。アーノルドの教育目的は、第一に宗教的・道徳的情操の高揚、倫理的な原理、第二に紳士の行動の実践、第三に知的能力の開発である。つまり、アーノルドの教育は道徳的・倫理的な原理・原則の理解、とその実践、最後に知的能力の開発にあったことから、知育よりも徳育、道徳的な人格形成の面に重点がおかれていたといえる。労働者階級の健康を脅かす極貧、過酷な労働、無知に加え、公衆衛生の悪さはエンゲルスがその著作で再三指摘している。エンゲルスやマルクスが指摘したと同じように

『大英帝国の子どもたち』<sup>125)</sup>、『ヴィクトリア時代のロンドン』<sup>126)</sup>には労働者階級の様子が如実に記述されている。『大英帝国の子どもたち』には、今日の社会を注意深く見てみますと、夜遅くまで街頭にたむろする少年・少女達の群れの現実描写があり、そこには深刻な危険がたくさん待ち受けており、悪い習慣が身に付き、総じて怠け、悪徳、犯罪の温床につかっているようなものであると述べられた。そして「騒々しい粗暴な振る舞い、野卑な言葉遣い、罪深いとしかいいようのない行いを做い覚えていく現実」<sup>127)</sup>があり、無気力で見ても無残な母親、その名に値しない母親が現に存在すると批判し、母親達はその義務や特権を忘れてしまっているかのようにであると述べられている。

そして、世界でも最高と言われる政治家の“計り知れないほどの大きな悲劇も、小さな事に付いての女性の不徳からくる無思慮が原因である”と述べ、無思慮は不徳であると述べた。女性達が無思慮であるということ、それは教育がなされていないからであった。女性達をある一つの目標に転向させること、それは暗闇の中ではるか遠くに見える星の光のようなものであり、道を指し示すことである。プラトンにおける光の中での太陽の光の感知にくさと、暗闇にいた者が明るさに慣れるまでの反応という考え方、それは暗闇の中でみる一点の光明は、神の存在を認識しやすい。ナイチンゲールの“徳”という考え方は神との一体感がある。「暗い部屋にいる者の方が太陽の運行を観察する哲学者よりも真に近い神についての観念を形成しやすいとはいえ、何が正しいかについての人間の感性を除けば、神の摂理を理解する力は、まだ、過去・現在、未来にわたる知識に属している。」<sup>128)</sup>と述べ、知識の増大が神の完全性についての観念を形成すると述べている。暗い部屋にいる者の方が太陽の運行を観察するより真に神についての観念を形成しやすいという考えは、プラトンがイデアについて説明したときの太陽と洞窟の関係と似ている。

また、“徳”という問題で言うならば、ナイチンゲールの『病院覚え書』<sup>129)</sup>にも明らかである。病院の衛生状況の粗悪さである。彼女が「病院とは患者が多くはその健康を回復し、大概の場合、健康が増進して自分の家族達の元に帰る為の学習の場であるべきであるのに、そうではなく、病院の事情に通じている者の多くが知っている事であるが、不道徳と下品さを助長させる場であるとい

われているのを私たちは知っている。それは評判の良くない女性が看護師として受け入れられ<sup>130)</sup>と述べているように、それは病院の機能と役割、看護師の役割と品性の問題である。病院とは病気の回復と健康の保持・増進の為の教育をする場所であるにも関わらず、現実には不道徳と下品さを助長させる場であった。その原因は正規の教育も受けずに品性の良くない看護師が、ただ金品の為だけに看護を行っているからであった。チャールズ・ディケンズ<sup>131)</sup>の著作『マーティン・チャズルウィット』<sup>132)</sup>にも指摘されたように、ギャンプ婦人という品性の卑しい大酒のみの看護師は、常に片手に酒のはいたカップを持ち、品のない笑い方と行儀の悪い挨拶をするなどの卑屈な態度をする人物である。彼女は、自分を専門看護師だと自認、病室では常にジンを要求、夜間は患者をベッドに縛りつけ、“騒ぐと舌を引っっこ抜くよ”と患者を黙らせ、自身の睡眠が妨げられないようにした。当時の専門看護師たちは、その顔にずるがしこさ、抜け目なさが漂い、アルコール臭さをプンプンさせ、インチキ占いの様な手法が彼女の専門的な特技<sup>133)</sup>であった。ディケンズはこの作品を通して、当時、存在した不道徳な看護師を告発したのである。

品性の悪い不道徳な女性達を道徳的にする事、即ち、それは社会で有用な存在にする事であり、これは一大社会改革であった。ナイチンゲールは自分の望んだ価値規範まで女性達が高まるよう教育する為に、修道院のような寄宿舎を提供した。ミッシェル・フーコー<sup>134)</sup>は、教育機関や救済援護施設が修道院の生活態度と規則正しさを受け継いでいたと述べ、時間・分・秒レベルでのその活動の取り締まりは、一種の技術的要素を持つ。そうした時間割は古くからの遺産であり、その最初のモデルは修道院であった<sup>135)</sup>と述べた。修道院のような日常生活における実践の中で、日々自己反省する人はその後の意志決定に影響を与え、次の場面では必要があれば行動変容につながるであろう。ナイチンゲールは、「人間の道徳的、知的、精神的能力が高度に啓発されればされるだけ神についての概念にますます近づくであろう。だが、理性と感性と良心のうちでは、真に啓発された感性が最も真なる神概念を与えるものである。」<sup>136)</sup>と述べ、これらすべての調和的発達が生じる概念を与えるとして、神の善は神の知恵や力よりいっそう高度な属性であるとした。

プラトンは国の守護者、指導者、立法者であるべき哲学者たちに必要な教育だと考えていた。プラトンが考える統治者の徳は智恵であり、戦士の徳は勇気であり、普通人の徳は節制である。国家が正しく運営されてはじめて、それに属する各個人の徳も正しいものになるのである。全体としての徳つまり公正が実現されるとの考えが、プラトンの理想国家のあり方につながったと考えられるのである。ゆえに、ナイチンゲール徳という事と知性、そしてその能力という点において、イギリス国民それぞれが己に課せられた徳を实践することで、全体としての徳つまり公正が実現されるとの考えは、プラトンの国家論の影響を受けているのではないかと考えられるのである。

#### 4. 国家の統治者の責務

自己を知れという考えは国家にも当てはまるとしたナイチンゲールの考えは、様々な組織改革の原点である。プラトンは、国家を統治するものは最も善なる人々でなければならない。プラトンの理想とした国家像は究極の超国家主義的な社会のありかたを理想とした。プラトンは、できうればただ一人の人による統治を望ましいものと考えていた。無知の愚かさが導く不幸について、「魂が積極的に試みるどんなことも、あるいは受動的に耐えしのぶどんなことも、全て、知が導くなら幸福に行き着くが、無知な愚かさが導くなら、これと逆の不幸に行き着いてしまう。」<sup>137)</sup>と述べ、「もしも、徳が、魂のうちにあるものの何かであり、そのものとして有益でなければならないならば、徳は知でなければならない。」<sup>138)</sup>と考えた。その上で、プラトンは「もしも政治家が知識のゆえに統率できているのではないなら、残っている可能性は、優れた可能性によって統率者になることである。政治家はそうした優れた推測を利用して国家を正しく治めているのであり、彼らは知の点では、託宣を述べる人々や神懸りの預言者と何ら異なるのだ。」<sup>139)</sup>と述べ、神懸りの人々が多く語ることはあっても自分が語っていることに対して何一つ知ってはいないと述べた。プラトンの著作『メノン—徳（アレテー）について』は“徳は何であるか、教えうるのか”“徳の教師を自認するソフィスト達は何を教えているのか”等、初期の頃からほぼ全篇に渡って教育論を展開している。プラトンは、ソクラテスに「徳は、それが人に備わる場合にはいつも神的な運命によってわれ

われに備わることには明らかである。だが、われわれが徳そのものについて明確なことを知るのはいかにして徳は人々に備わるのか？ということ以前に、徳はそれ自体として、いったい何であるか？の問題に着手するときなのだ。』<sup>140)</sup>と言わしめている。つまり、プラトンは、“徳”が備わるには、徳とは何かという問題を解明しなければ“徳”は備わらないと考えたのである。

ナイチンゲールの、システムの愚かさによる病院での死亡率は、国家の過ちによるものであり、その結果、勇敢な男性達が結果的に全て負担を背負ったとの言葉は、プラトンの“無知の愚かさ”が導く不幸”という考え方と類似である。ナイチンゲールの主張は、統治者が負うべき責務についてである。主張の多くはクリミアで経験したことによる陸軍組織と病院の機構の問題、物資供給システム、医師の技術不足などの問題である。彼女の思想の背景には人間存在の問題として人格と生存権の問題がある。人々の生存の問題は、イギリス国民の健康ニーズであり、国民の正統な権利であり、国家が保障しなければならない責務である。

イギリス労働者階級の実態で言えば、ナイチンゲールは、「現事態に置ける最大の奇跡は、健康なのかそれとも病気になるのか。また生なのか死なのか。われわれのうちのある者にとっては、自分たちの無知と怠慢とが作り出している環境内で卑しくも生きていられるということ、これは毎日繰り返されている最大の奇跡である。』<sup>141)</sup>と述べている。ナイチンゲールにしてみればこれらはまさに社会悪であった。イギリス社会の現実には腐敗した社会であり、その病巣は明らかであった。貧困が無知をもたらし、無知が病気をもたらす。その病気はまた貧困につながる。この悪循環はたちきらねばならない。その手当てこそが国家の重要な使命であるべきであった。まさに、自己をしれという言葉は国家にも当てはまったのである。ナイチンゲールは、貧困・無知・病気といった社会悪への手当は人間の病気同様、まさに現実的な対応が必要であり、国家の責務であった。

さらに、『ミルとの論争』でも報告したが、ちまたの“女性の権利”運動に憂慮していたナイチンゲールは「無数のおしゃべり女達、英国女性が女性の権利に付いてとうとうと語るといふ事は女性の汚点である。』<sup>142)</sup>と非難した。彼女は、陸軍の改革中にマーティノウに宛てた手紙には「女性のインク壺 female ink bottles”』<sup>143)</sup>と書いた。

そして、「私たちは、自らの血を祖国に捧げる人々のことを昔よく聞いたものである。いったい、いつから人々はインクしか差し出さなくなったのであろうか？」<sup>144)</sup>と述べた。自らの血を祖国に捧げる人々とは国家主義的な人たちのことであろうか。また、国防に身を捧げる兵士たちのことを引き合いに出しているのであろうか？そして、女性のインク壺とは恐らく文筆家たちを批判しているのであろう。ナイチンゲールは、知識があつて良くしゃべるが、目的に向かって行動しない女性達に対するいらいら感を募らせていたように思える。その言葉の攻撃の向こうには、英国における極めて珍しい事態に置かれているとして婦人の仕事や夫人の使命を求める声、つまり、それは“女性の権利”運動家たちのことであると考へた。

『インド駐在陸軍の衛生』<sup>145)</sup>問題や『インドにおける生と死』<sup>146)</sup>についても国家の責務について論じている。「性病病院は不道徳な人間をその不道徳が続けられるように回復させ復帰させるという原理に基づいて擁護され、支持されている」と述べ、兵士の性病についてその不道徳さと、併せ、酒浸りという兵士の不道徳さについて、良識 (common sense) についてである。ナイチンゲールは、「政府はこの悪に対してその強力な権力を行使することもなく、また兵士たちに有益な仕事や男性的な娯楽等を与えることもしないで、その代わりに、その権能を用いて性病病院を設立し、またできる限り自らの手によって酒類の供給を続けることによって、アルコール中毒を阻止しようなどと、空しい努力を続け、結果的には自らの権能によって悪を助長しているのである。』<sup>147)</sup>と述べ、政府はこれらの悪について責任を負うべきであると言及した。そして、「低賃金労働、廉価な動力と運賃、そして安価な食料を持ってインドでは、高価な工業生産、文明、日常生活等を持ちうるだろうし、それら全部が、この世界を、神が野獣よりも上で、ほんの少しだけ天使よりも下に造り給もうた人間にとって生きる価値のあるものにするのだ。』<sup>148)</sup>と結論づけている。

国内における諸問題を解決し、国民が健康的な生活を保障するのが国家の責務であると考えたナイチンゲールは、自己を知れという考えは国家にも当てはまると考へたであろう。彼の理想国家は、その成員それぞれが己に課せられた徳を実践することで、全体としての徳つまり公正が実現される。各階級に固有の徳と国家全体としての徳との

関係では、国家の徳が優先されるが、それは、国家が正しく運営されてはじめて、それに属する各個人の徳も正しいものになると考えたからであり、ナイチンゲールがイギリス国家に求めた責務であったと考える。以上のことから、ナイチンゲールの考えは、「ある一つの階層だけが特別に幸福になるように、というのではなく、国の全体ができるだけ幸福になるように」<sup>149)</sup>と述べるプラトンの理想国家のあり方と類似の思想を見出すことができる。

## ■ おわりに

本論は『フロレンス・ナイチンゲールの生涯』にベンジャミン・ジョウエットとナイチンゲールが、プラトンの『対話集』を改訳する際に、プラトンの神秘主義とイデア論との合体論の正当性等について語り合ったという記載を見つけ出したことに端を発する。非常に興味深い一文であった。その興味への探究が本論である。ジョウエットはイギリスのギリシャ学者であり、プラトンはギリシャの偉大な哲学者である。イギリスのギリシャ哲学研究者であるジョウエットがプラトンの『対話集』を改訳する際にナイチンゲールの意見を聞いたという事は、ナイチンゲールのギリシャあるいはプラトン哲学への造詣の深さを意味しているとも考えられた。そうした出来事は一つの経験であり、経験学習は後の彼女の行動に大きな意味をもたらすと考えられた。プラトンの思想について筆者は残念ながら熟知しているとは言えない。

ナイチンゲールの業績から彼女の思想を探究するにも困難を極めている段階ではあるが、しかし、ナイチンゲール研究の過程で、彼女の思想には、プラトンの影響を受けているのではないかと考えられる部分が多々あった。特に彼女の兵士を思いやる態度や女性の権利運動問題での発言等に国家主義的思想があるのではないかと考えられた点である。そこで、本論では、プラトンの生涯探求から開始し、少しでもプラトンの哲学にアプローチしようと取り組んでみた。師ソクラテスから学んだ弁証法の中で、特にプラトンの哲学は、“徳”という問題であり、その“徳”が理想国家のあり方、あるいは統治者の“徳”につながった認識したことから、ナイチンゲールにおける“徳”のあり方に焦点を当てつつ、プラトン哲学との思想的一致点を見出そうと試みた。特に神秘主義と徳に

についてはナイチンゲールの生涯における重要課題であり、プラトンのイデア論と神秘主義との関係と同じように、ナイチンゲールの思想には、神秘主義と主知主義的哲学との一体感があったように思う。

その原点は彼女の育ったイギリス社会と家族、そして教育にあったと考えている。イギリス社会におけるケンブリッジ・プラトニストたちの出現は、伝統や宗教的制約から脱却して個人の合理的主知主義の傾向は、ナイチンゲールの生涯から考えたとき、彼女自身がギリシャに思いを寄せる機会にもなり得た。しかし、傾倒するだけでは問題は解決しない。そのギリシャに対する歴史理解や記載された文章を母国語に翻訳できる知識と技術がなければ語ることもできなかったであろう。まず、ナイチンゲール一家が上流社会に属し、ヨーロッパ諸国を旅する一家の一員であったこと、ナイチンゲールの父親からギリシャ語を学んでいたこと、そして彼女の友人の中にギリシャに造詣が深いブレスブリッジ夫妻の存在があったことなどがあげられよう。夫のブレスブリッジ氏は、ギリシャ解放運動に傾倒している人物であり、ナイチンゲールをエジプトやギリシャ旅行に連れ出すなどの支援を行っている。こうしたことも、ナイチンゲールがギリシャに対する造詣の深さにつながったと考える。ナイチンゲールの著作、『カサンドラ』は『ギリシャ神話』に登場するトロイ軍のカサンドラ王女のことであり、彼女は敵に捕えられ、奴隷としてギリシャ軍に連れて行かれ、辛酸をなめたという。自身を家庭内の奴隷であると考えたナイチンゲールの日常生活における問いは、知性と心との関係で問題を解決しようとする。

ナイチンゲールの早すぎた目覚めとプラトンの太陽と洞窟の比喩に見るイデア論とが一つになったところであろう。ナイチンゲールは、宗教的な概念を強く強調しながらも、“伝統的な社会”の冷酷な現実の中で、伝統的な規制に女性が服従している無意味な生活を繰り返し述べ、女性が自己の生活も調整できないで、心霊的にも精神的にも貧弱な生き物になっていると指摘した。それは不徳の為せるものであり、その不得な女性たちを有徳にさせること、それが教育であった。プラトンの哲学も最終的には教育論であると有徳ではない統治者に支配される国民の悲惨さは、ナイチンゲールも経験した事であった。ゆえに、彼女は女性達に教育を施して女性達を無知蒙昧から解放さ

せ、自由に自身の目標を人生の中に見出すことができるようにすることであった。それはプラトンが主張する国家統治者を徳の方向へ向け替えさせるために必要な教育論と同じであると考えた。

プラトンが偉大な哲学者であるがゆえに、非常

に困難な問題に挑戦したものだといながらあきれってしまうほどに筆者の未熟さが明らかな論文になってしまった。現時点では論を尽くしたとはいえないが、しかし、自身の能力の限りをつくしたと思っている。

## 注釈

- 1) デルポイ (Delphoi)；ギリシャの首都アテネから西北へ122km、スパルタからは北へ約157kmの位置にある。デルポイの遺跡は、アポロン神殿を中心とする神域があり、ギリシャ最古の神託所である。デルポイの神託はギリシャ神話にも登場し、オイディプス伝説がある。神殿入口には、神託を聞きに来た者に対して、汝自身を知れ、過剰の中の無（過ぎたるは及ばざるがごとし、多くを求めるな）、誓約と破滅は紙一重（無理な誓いはするな）の3つの格言が刻まれていたとされる。
- 2) ソクラテス (Sōkratēs 紀元前469-399)；古代ギリシャの哲学者であり、妻は悪妻として知られるクサンチッペ。ソクラテス自身は著述を行っていないので、その思想は弟子の哲学者プラトンやアリストテレスなどの著作を通じ知られる。父は彫刻家あるいは石工のソプロニスコス、母は初産婦のパイナレテとされる。ソクラテスは対話を通じて相手の持つ考え方に疑問を投げかける問答法は相手が知識を作り出すことを助けるということで「産婆術 (助産術)」とも呼ばれている。
- 3) Florence Nightingale (1888); To the nurses and probationers trained under the “Nightingale Fund”, (湯慎ます他訳；ナイチンゲール著作集第三巻、看護師と見習い生への書簡, p307, 現代社, 1985年.)
- 4) 佐々木秀美著；ナイチンゲール—イギリス陸軍省を改革する—学習(経験)したことから学習せよ—, 看護学統合研究 Vol.13, No.1, pp29-48, 2011年.
- 5) Sir Edward T. Cook; The Life of Florence Nightingale, (中村妙子他訳；ナイチンゲール [その生涯と思想 I], p178, 時空出版, 1993年.)
- 6) 佐々木秀美著；ナイチンゲール教育思想の源流, 看護学統合研究, Vol.12, No.1, pp42-67, 2010年.
- 7) 佐々木秀美著；ナイチンゲール—精神的危機から自立へのプロセス—真実の目は真理の探究につながる—, 看護学統合研究, Vol.12, No.2, pp28-47, 2011年.
- 8) プラトン主義 (Platonism)；プラトン自身の思想を継承する立場である。プラトンの根本思想は現実を理想に依存させる理想国家の形成や何が個人の幸福をもたらすかなどの問題を真剣に探究することが哲学の第一の課題であるとする。
- 9) フランシス・ベーコン (Francis Bacon 1561-1625)；ケンブリッジ大学で法学を学んだ後、ジェームズ一世の時、Lord Chancellor となったが、汚職のかどによって追放され、一時、ロンドン塔に幽閉された。その後は、研究と著作に没頭した生涯を送った。彼の思想は、全ての真理性の探究を人間の経験論的認識に求め、経験的実証によって実在を明らかにしようとするものであり、従来の演繹的方法を退け、経験と実験によって真理性を問う帰納法を提唱した。
- 10) ジョン・ロック (John Lock 1632-1704)；イギリス経験論の代表的哲学者。近代民主主義の代表的思想家の一人。オックスフォードにて医学と哲学を学ぶ。ピューリタン革命、王政復古、名誉革命と激動していく時代に生活し、人民主権に基づく代議的民主政治の理論を基礎づけることによって、名誉革命の指導的理論家になった。医師でもあり、ホイッグ党初代党首、シャフツベリー伯爵と親交を結び、政治的にもその生涯を共にした。著作『教育に関する考察』は有名。
- 11) 主知主義 (intellectualism)；人間の精神 (魂) を「知性・理性 (理知)」「意志・気概」「感情・欲望」に三分割する見方の中で、知性・理性の働きを (意志や感情よりも) 重視する哲学・神学・心理学・文学上の立場のことであり、知性主義とも言う。「合理主義・理性主義 (rationalism) と類似した概念だが、理性そのものよりも、獲得が目指される「知識」「知性」の方に、より重きをおいた表現となっている。意志の働きを重視する主意主義 (voluntarism) や、感情の働きを重視する主情主義



- (emotionalism) と対置される。
- 12) 塚田理著；イングランドの宗教—アングリカニズムの歴史とその性質, pp177-178, 教文館, 2004年.
  - 13) 神秘主義 (mysticism)；神・絶対者・存在そのものなど究極の存在になんらかの仕方では統一融合できるという哲学. 宗教上の立場. 東洋ではインドのヨガ, 西洋ではプロティノスに始まり新プラトン学派などがある. 現在ではハイデガーが有名.
  - 14) トマス・アーノルド (Thomas Arnold 1795-1842)；イギリスの教育学者. オックスフォード大学に学び, 1828年にラグビー校の校長に就任した. 青少年の教育に携わりながら, 彼らに広い視野に立つ思想的可能性を開花させた. 彼の思想的影響を受けた青年神学者たちが, コールリッジ (注15)の哲学や思想を吸収し, 新たな神学的枠組みを形成したといわれる. 『イングランドの宗教』 p216より.
  - 15) サミュエル・コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge 1772-1834)；英国の詩人・思想家. ケンブリッジ大学で学び, ドイツ哲学に関心を持った. 彼は当時のプロテスタンティズムに反対し, 物質主義的合理主義を批判し, 宇宙空間的広がりを持つ精神的創造的世界の文脈の中で, 宗教的真理を把握しようとした. 『イングランドの宗教』 p216より
  - 16) Cecil Woodham-Smith (1950)；Florence Nightingale, (武山満智子他訳；フロレンス・ナイチンゲールの生涯〔上・下巻〕, 現代社, 1987年.)
  - 17) プラトン (Platon B・C427-347.)；アテナイの貴族の息子として生まれた. プラトンは三つの対話集『弁明』『クリトン』『パイドロス』を著して, 師ソクラテスの裁判と最後の日々を忘れられないものにした. この対話集にはソクラテスに対するプラトンの深い敬虔が鮮明に現れているとされる.
  - 18) イデア論 (idea)；プラトン哲学の中心概念で理性によってのみ認識される実在. 価値判断の基準となる. 近世以降, 観念, または理念の意となる.
  - 19) Cecil Woodham-Smith；前掲書16).
  - 20) ベンジャミン・ジョウエット (Benjamin Jowett 1817-1893)；イギリスのギリシャ哲学者. ナイチンゲールの思想に共鳴し, 彼女の仕事を手伝い, 多くの助言を与えた. ナイチンゲールの生涯の友人である.
  - 21) Litton Strachey; Eminent Victorians, Penguin Books, p157, 1986.
  - 22) 田中美知太郎著；プラトン I 生涯と著作, 岩波書店, 1983年.
  - 23) Philip Sidney Horky; Plato and Pythagoreanism, Oxford Univ PR, 2013.
  - 24) プラトン著, 藤沢令夫訳；国家論上, 岩波文庫, 2010年.
  - 25) プラトン著, 藤沢令夫訳；国家論下, 岩波文庫, 2010年.
  - 26) 高橋雅人著；プラトン『国家』における正義と自由, 知泉書館, 2010年.
  - 27) プラトン著, 久保勉訳；ソクラテスの弁明 クリトン, 岩波書店, 1992年.
  - 28) 渡辺邦夫著；メノン—徳 (アレテー) について, 光文社古典新訳文庫, 2013年.
  - 29) ソロン (Solon B・C639-559年頃)；古代アテナイの政治家・立法者. 当時のアテナイにおいて政治・経済・道徳の衰退を防ごうとして法の制定に努めたことで有名であり, アテナイの民主主義の基礎を築いたとされる.
  - 30) アリストテレス著, 村田堅太郎訳；アテナイ人の国制, 岩波文庫, 2013年.
  - 31) ピュタゴラス学派 (Pythagorean school)；ピュタゴラス教団 (Pythagorean Order) とも言うて古代ギリシャにおいて哲学者のピュタゴラス (Pythagoras, 582-496. ピュタゴラスの定理などで知られる古代ギリシャの哲学者) によって創設されたとされる一種の宗教結社. 現在の南イタリアのロクリスに本拠を置き, 数学・音楽・哲学の研究を重んじた. 前5世紀ごろに盛んであった. ピュタゴラス学派をピュタゴラス学説 (Pythagoreanism) という. 古代ギリシャからの影響から輪廻転生の考え方を有していた. また原子強酸性を敷いており, 財産を共有することを結社に入る第一の条件にしていた.
  - 32) アリストテレス (Aristotle's, B・C384-322)；古代ギリシャの哲学者であり, プラトンの弟子としても有名. ソクラテス, プラトンと並んで, しばしば「西洋で」最大の哲学者の一人と見なされる.

- また、その多岐に亘る自然研究の業績から「万学の祖」とも呼ばれる。イスラム哲学や中世スコラ学、更には近代哲学・論理学に多大な影響を与えた。また、マケドニア王アレクサンドロス3世（通称アレクサンドロス大王）の家庭教師であったことでも知られる。
- 33) プラトン著、藤沢令夫訳；前掲書24)。
  - 34) プラトン著、藤沢令夫訳；前掲書25)。
  - 35) 藤沢令夫著；プラトンの哲学，岩波新書，2012年。
  - 36) 下中弘編集；哲学辞典，平凡社，1997年。
  - 37) プラトン著，藤沢令夫訳；前掲書25)，p113。
  - 38) 輪廻転生説；輪廻とは，サンサーラと言い生き物が死して後，生前の行為（カルマ）(karman)の結果，次の多様な生存となって生まれ変わることである。インドの思想では，限りなく生と死を繰り返す輪廻の生存を苦と見，二度と再生を繰り返すことのない解脱を最高の理想とする。また，そう考える思想のことを言う。漢字の輪廻は生命が無限に転生を繰り返すさまを，輪を描いて元に戻る車輪の軌跡に喩えたことから来ている。
  - 39) 渡辺邦夫著；前掲書28)，p95。
  - 40) 渡辺邦夫著；前掲書28)，p106。
  - 41) プラトン著，藤沢令夫訳；前掲書25)，p116。
  - 42) 渡辺邦夫著；前掲書28)，p106。
  - 43) 渡辺邦夫著；前掲書28)，p106。
  - 44) 渡辺邦夫著；前掲書28)，p152。
  - 45) 渡辺邦夫著；前掲書28)，p156。
  - 46) アリストテレス著，村田堅太郎訳；前掲書30)。
  - 47) スパルタ (Sparta)；スパルタは，現在のペロポネソス半島南部スパルティにあった古代ギリシャの時代の都市国家（ポリス）である。自らはラケダイモン (Lakedaimōn) と称した。ペロポネソス同盟の盟主となり，アテナイやテーバイなどと覇権を争った。他のギリシャ諸都市とは異なる国家制度を有しており，とくに軍事的教育制度は「スパルタ教育」として知られる。
  - 48) ペロポネソス戦争 (Peloponnesian War B・C431-404)；アテナイを中心としたデロス同盟（古代アテナイを中心として結成されたポリス間の軍事同盟であり，アテナイを盟主としてイオニア地方など主にエーゲ海の諸ポリスが参加）スパルタを中心とするペロポネソス同盟（スパルタを盟主とするペロポネソス半島の諸ポリスからなる同盟）との間に発生した。古代ギリシャ世界全域を巻き込んだ戦争である。
  - 49) リュクルゴス (Lycurgus, B・C219-210)；スパルタ末期の王。王家の血筋ではないが王に選ばれた人物。
  - 50) プルタルコス，村川堅太郎編；プルタルコス英雄伝，上，筑摩書房，2013年。
  - 51) プルタルコス (Plutarchus B・C46, 48頃-127頃)；帝政ローマのギリシャ人。伝記作家。歴史家。哲学者。ギリシャのアテナイで学び，ローマで倫理・政治・宗教などについて論じている。
  - 52) 哲人王 (Philosopher king)；プラトンが中期対話篇『国家』において述べた理想国家の君主のことである。
  - 53) Harriet Martineau's Writing; British History and Military Reform vol.6, England and her Soldiers, p295, Edited by Deborah Anna Logan Pickerring & Chatto, 2005.
  - 54) 佐々木秀美著；ナイチンゲール—イギリス陸軍を改革する—学習（経験）したことから学習せよ—，看護学統合研究 Vol.13, No.1, pp29-48, 2011年。
  - 55) Harriet Martineau; 前掲書53)，pp124-127。
  - 56) ハリエット・マーティノウ (Harriet Martineau 1802-1876); 英国の女流小説家，経済学者。デイリー・ニュースの主筆をしていた。彼女は情報や知識を小説の形で出すことを思いつき，数多くの物語を書いて政治や経済や救貧院の話などを解りやすく解説して好評を得た。
  - 57) シドニー・ハーバート (Herbert Sidney 1810-1861)；ナイチンゲールの生涯のパートナーであり，

- 良き理解者、協力者である。名門ペンブルック伯爵家に生まれ、政治家となった人物。1852-1855、1859-1860に陸軍大臣を務め、ナイチンゲールの改革を推進した。しかし、激務のため病気となり、公務からの引退を希望するが、ナイチンゲールはそれを許さなかったといわれている。辞職後に病死。
- 58) Harriet Martineau; 前掲書53), p142.
- 59) Harriet Martineau; 前掲書53), p148.
- 60) Harriet Martineau; 前掲書53), p152.
- 61) Harriet Martineau; 前掲書53), p226.
- 62) Harriet Martineau; 前掲書53), p236.
- 63) Florence Nightingale (1858) ; Subsidiary Notes as to the Introduction of Female Nursing into Military Hospitals. (湯植ます他訳：ナイチンゲール著作集第一巻，女性による陸軍病院の看護，p70，現代社，1985年.)
- 64) Harriet Martineau; 前掲書53), p 297.
- 65) リットン・ストレイチー (Lytton Strachey 1880-1932)；英国の伝記小説家。ケンブリッジ大学に学び、ロンドンで作家、芸術家の一員となり、批評家として出発し。『Eminent Victorians』は伝記のジャンルにおいて典型的であった自身満々の大冊主義に対する型破りな挑戦状となった。
- 66) Litton Strachey; 前掲書21), p97.
- 67) トマス・アレクサンダー (Dr. Thomas Alexander 不詳-1860)；クリミア戦争の最前線で勤務した有能な外科医。戦後はカナダへ左遷されたが、ナイチンゲールの側近として、ナイチンゲールによって陸軍医務局長となる。1860年急死した。
- 68) Florence Nightingale (1863) ; Observation on the evidence contained in the stational reports submitted to her by the Royal Commission on the sanitary state of the army in India. (湯植ます他訳：ナイチンゲール著作集第三巻，インド駐在陸軍の衛生，現代社，1983年.)
- 69) Florence Nightingale (1865) ; Suggestions on System of Nursing for Hospital in India. (湯植ます他訳：ナイチンゲール著作集第一巻，インドの病院における看護，現代社，1983年.)
- 70) Florence Nightingale (1863) ; Life or death in India. (湯植ます他訳：ナイチンゲール著作集第三巻，インドにおける生と死，現代社，1983年.)
- 71) 『インド陸軍の衛生状況に関する勅撰委員会によって考察を委託された駐屯地報告書中の調査報告に関する所見』(わが国では『インド駐在陸軍の衛生』として翻訳出版されている。
- 72) エドワード・ヘンリー・スミス・スタンレー卿 (Edward Henry Smith Stanley 1820-1893)；英国の政治家。主として外交政策上移民政策に尽力し、特にイギリス国王のインド直接統治実現に尽くした。
- 73) Florence Nightingale; 前掲書67), p67.
- 74) Florence Nightingale; 前掲書67), p72.
- 75) Florence Nightingale; 前掲書67), p82.
- 76) Florence Nightingale; 前掲書67), p82.
- 77) Harriet Martineau; 前掲書53), p248.
- 78) Harriet Martineau; 前掲書53), p240.
- 79) Harriet Martineau; 前掲書53), p251.
- 80) Florence Nightingale; 前掲書69), p139.
- 81) Florence Nightingale; 前掲書69), p140.
- 82) Cecil Woodham-Smith; 前掲書16), p292.
- 83) 中世神秘主義 (mysticism)；神秘主義は神秘的体験に中心的な意義を認める宗教的あるいは哲学的立場をいい、主としてその伝統は、キリスト教やプラトン主義から発している。中世になるとスコラ神学者やドイツ神秘主義の運動は、マルチン・ルターの宗教改革にも影響を与えた。
- 84) Cecil Woodham-Smith; 前掲書16), p294.
- 85) Litton Strachey; 前掲書21).

- 86) ヘンリー・エドワード・マニング (Henry Edward Manning 1808-1892) ;ローマ・カトリックの聖職者。オックスフォード大学に学び、イギリス国教会の聖職者となる。1851年にカトリックに転向、1865年にはウェストミンスターの大司教に任命された。1875年に枢機卿になり、教皇至上論の代表者であり続けた。
- 87) バーモンゼイ修道院長 (Mother Superior of the Bermondsey. Mrs, Georgiana) ; バーモンゼイはローマン・カソリック女子修道院の尼僧長。マニング大司教の協力により、ナイチンゲールのクリミア行きに同行し、協力した。ナイチンゲールのクリミアにおける多くの成功は彼女に負うところが多いと評されている。
- 88) Florence Nightingale (1860) ; Suggestions for Thought to searchers after religious truth, (湯積ます他訳; ナイチンゲール著作集第三巻, 思索への示唆, pp200-201, 現代社, 1985年.)
- 89) フレデリック・ウィルヘルム・ニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche 1844-1900) ; ドイツの哲学者。キリスト教倫理思想を弱者の奴隷道徳とし、強者の主人道徳を説き、この道徳の人を「超人」と称し、これを生の根源にある権力意志の権下と見た。また、伝統的形而上学を幻の背後世界を語るものとして否定し、神の死を告げた人物である。
- 90) 実存主義 (existentialism) ; 実存主義とは、実存を哲学の中心におく思想的立場。「主体性が真理である」として神から与えられた可能性を実現することに生の意義を見出したキルケゴール (注119) 参照) に対して、個人を哲学的考察の対象にしようという機運が盛り上がり、神の死 (「神は死んだ」) を宣言し、能動的な思想を展開したニーチェ (注88参照) を実存主義の系譜の先駆者としてドイツに広がり、第二次大戦後、ジャン＝ポール・シャルル・エマール・サルトル (Jean-Paul Charles Aymard Sartre 1905-1980 フランスの哲学者) 等によって世界的な広がりをみせた。
- 91) ポスト構造主義 (Post-structuralism) ; 1960年後半から1970年後半頃までにフランスで誕生した思想運動の総称である。代表的な思想家はミシェル・フーコー (注133参照) であり、現象学に影響を受けている。
- 92) マシュー・アーノルド (Matthew Arnold 1822-1888) ; イギリスの詩人、批評家。トマス・アーノルドの息子。『教養と無秩序』などでイギリス国民の清教徒的偏狭を攻撃して、ギリシャ精神の必要を説き、文芸批評から文明批評に至った。
- 93) マシュー・アーノルド著、石田憲次訳; 文学とキリスト教義—聖書のより良き理解のための試練—, p326, あぼろん社, 1982年。
- 94) マシュー・アーノルド著、石田憲次訳; 前掲書92), p326.
- 95) Florence Nightingale; 前掲書87).
- 96) Florence Nightingale; 前掲書87), p164.
- 97) Florence Nightingale; 前掲書87), p164.
- 98) ユニテリアン (Unitarian) ; 正統的キリスト教の教義である三位一体論に反対し、父なる神だけを認め、子なるイエス・キリストの神性を否定しキリストの人間性を強調する教派および主張。神学的には、4世紀に異端とされたアリウス派もその一つといわれている。
- 99) Sir Edward T. Cook; 前掲書5), p328.
- 100) メアリー・クラーク (Mary Clarke Mohl 1793-1883) ; 子ども時代から成人するまで各地を転々とするが、マダム・レカミエの支援により、パリに“クラーク”という最も優秀で知的なサロンを持った。特にヘンリー・ボナハム・カーターや文学者たちと親密な交友関係を持った。
- 101) Sir Edward T. Cook; 前掲書5), p73.
- 102) イマヌエル・スエデンボルグ (Emanuel Swedenborg 1688-1772) ; スエーデン生まれ。神秘主義者、自然科学者、自己の神秘的体験から霊的な世界と直接交信できることを確信。『天界の秘儀』において自身の霊的体験の記述をした。1787年に彼の信奉者たちによって新エルサレム教会派ができた。
- 103) イマヌエル・スエデンボルグ著、柳瀬芳意訳; 天界と地獄, 静思社, 1998年。
- 104) イマヌエル・スエデンボルグ著、柳瀬芳意訳; 結婚愛, 静思社, 1991年。
- 105) Florence Nightingale; 前掲書94), p188.

- 106) Sir Edward T. Cook; 前掲書5), p75.
- 107) Florence Nightingale; 前掲書87), p202.
- 108) Florence Nightingale; 前掲書87), p165.
- 109) Florence Nightingale; 前掲書87), p166.
- 110) Florence Nightingale; 前掲書87), p164.
- 111) Florence Nightingale; 前掲書87), pp200-201.
- 112) オーギュスト・コント (Auguste Comte 1798-1857); フランスの哲学者, 社会学者, 実証主義の始祖. サン・シモンの弟子. 彼は, 全ての科学は神学的段階から形而上学的段階を経て, 実証的あるいは経験的段階にいたったものとみなし, 実証的宗教においては, 崇敬の対象は人間性であり, その目的は人類の幸福と進歩にあるとした.
- 113) 清水幾太郎編; 世界の名著46 コント, 『社会静学と社会動学』, p256, 中央公論社, 1995年.
- 114) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale; Cassandra/Suggestions for Thought, p30, Pickering & Chatto Limited, 1991.
- 115) Florence Nightingale; 前掲書3), p176.
- 116) Mary Poovey Edited; 前掲書113), p164.
- 117) Mary Poovey Edited; 前掲書113), pp167-168.
- 118) Florence Nightingale; 前掲書3), p271.
- 119) Florence Nightingale; 前掲書3), pp430-431.
- 120) ゼーレン・オービエ・キルケゴール (Soren Aabye Kierkegaard 1813-1855); デンマークの宗教思想家. 真のキリスト者を求め, 信仰によって神の前に立つ人であり, そこに真の人間の生き方がある. 人間は常に真の自己たらんと欲する限り, 永遠者を求めて努力する必要がある, その努力の過程が実存するという事である.
- 121) キルケゴール著, 芳賀檀訳; 愛について, p108, 新潮文庫, 1952年.
- 122) キルケゴール著, 芳賀檀訳; 前掲書120), p225.
- 123) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale; 前掲書113), p205.
- 124) ロバート・オーウェン (Robert Owen 1771-1858); イギリスの近代社会主義の創始者. 学歴は小学校程度であるが, 彼の経営するスコットランド, ニュー・ラナーク紡績工場における「性格形成学院」の実践は, 直観教授などの進歩的方式を採用し, 世界最初の幼稚園と言われた.
- 125) スチーブン・フンフリーズ著, 山田潤他訳; 大英帝国の子供達, 柘植書房, 1990年.
- 126) L・C・B・シーマン著, 社本時子他訳; ヴィクトリア時代のロンドン, 創元社, 1992年.
- 127) スチーブン・フンフリーズ著, 山田潤他訳; 前掲書124), p34.
- 128) Florence Nightingale; 前掲書87), pp156-157.
- 129) Florence Nightingale (1863); Note on Hospital, (湯楨ます他訳; 病院覚え書, ナイチンゲール著作集第二巻, 現代社, 1983年.)
- 130) Florence Nightingale; 前掲書3), p14.
- 131) チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens 1812-1870); イギリスの小説家. 法律事務所で下働き後に民法博士会館の議事速記者になり, 22歳でロンドンの新聞記者になる. 彼は小説中に多彩な人物を登場させ, その当時の社会悪を激しく批判した. 小説『マーティン・チャズルウィット』ではギャンプ婦人という卑しい女性を登場させ, 病院看護の実態を批判した.
- 132) Charles Dickens; MARTIN CHUZZKEWIT, Oxford University Press, 1987.
- 133) Charles Dickens; 前掲書131), p425.
- 134) ミッシェル・フーコー (Michel Foucault 1926-1984); フランスの哲学者. 実証的な科学的思考とも哲学的存在論的違った無意識的文化の体系に思考の基底を求め, これをエピステーメと呼んでその変化をヨーロッパ思想の根底に探り, 人間諸科学の考古学を目指した.
- 135) Michel Foucault (1975); Naissance De La Prison, (田村俣訳; 監獄の誕生, p154, 新潮社, 1977年.)
- 136) Florence Nightingale; 前掲書87), p156.

- 137) 渡辺邦夫著；前掲書28), p106.
- 138) 渡辺邦夫著；前掲書28), p106.
- 139) 渡辺邦夫著；前掲書28), p153.
- 140) 渡辺邦夫著；前掲書28), p156.
- 141) Florence Nightingale (1894); Health Teaching in Town and Villages. Rural Hygiene, (湯槇ます他  
訳；ナイチンゲール著作集第二巻, 町や村での健康教育, p159, 現代社, 1983年.)
- 142) Evelynl, Pugh; Florence, Nightingale and J. S. Mill Debate Women, S Rights; p122, Journal of  
British Studies, 1988.
- 143) Martha Vicinus & Bea Nergaard Edited; Ever Yours, Florence Nightingale Selected Letters,  
p203, VIRACO PRESS, 1989.
- 144) Florence Nightingale (1871) ; Memorials of Agnes Elizabeth Jones. (湯槇ます他訳；ナイチン  
ゲール著作集第三巻, アグネス・ジョーンズをしのんで, p250, 現代社, 1983年.)
- 145) Florence Nightingale (1863) ; 前掲書67).
- 146) Florence Nightingale (1863) ; 前掲書69).
- 147) Florence Nightingale (1863) ; 前掲書67), p82.
- 148) Florence Nightingale (1863) ; 前掲書69), p140.
- 149) プラトン著, 藤沢令夫訳；前掲書24), pp291-292.